

哲學研究

第三百四十九號

第三十卷
第四冊

思考の心理學的意義

矢田部 達 郎

一、精神生活に於ける思考の位置

近世の心理學は意識をその研究對象とした。これを意識主義の心理學と云ふ。然るに漸次心理學の對象として意識は或る意味に於ては廣きに過ぎ、又或る意味に於ては狭きに過ぎることが明らかにされるやうになつた。意識と云ふことを廣義に解釋すれば物理現象も亦意識を通して與へられる。従つてこの意味に於ける意識は心理現象ばかりではなく物理現象をも包括することになり、これは心理學の對象としては廣過ぎる。意識と云ふことを狭義に解釋すれば我々に氣付かれることのみを意識と名づける。然るに例へば我々が本を讀むとき、本に書いてある文字は多くは氣付かれずに意味だけが領解されて行く。文字を讀んでゐるのは確かであり、それは精神の働

きであるから、心理學の對象をかゝる意味の意識に限れば、所謂無意識的な精神現象は心理學の對象領域から排除されることになり、それでは心理學の對象としては狭きに過ぎるのである。そこで意識されると否とに拘はらず凡ゆる精神現象は心理學の對象であると考へるのが適當であると思はれる。併しこの場合にも、精神現象と云ふことを廣義に解釋すると、所謂文化現象も亦そのうちに含まれることになり、文化科學一般が心理學の一部となつて、これでは心理學の領域の不當な擴大が起る。文化は精神の所産ではあるけれども、一旦それが生産されれば、言語の如く、藝術の如く、社會制度の如く、個人の力ではどうすることもできぬやうな客觀性を獲得する。かゝる客觀的精神の客觀的法則を研究するものが文化科

學であつて、それは心理學ではない。言語心理學、藝術心理學、社會心理學等と云ふのは、かゝる客體を生産する精神の働きを取扱ひ、又かゝる客體が逆に精神に働きかける場合の法則を明らかにせんとするもので、文化科學と文化心理學との間に密接な關係のあることは勿論であるが、兩者は到底それを同一視することができない。そこで心理學は精神現象の學ではなく、精神活動の學であり、或は精神生活の學であり、精神的行動の學であると云はなければならぬ。

心理學は精神活動の學であると云ふ定義は極めて簡單明瞭であり、而もそれは心理學の祖と云はれるアリストテレスの根本思想でもあつたのであるのに、近世の心理學は何故それを意識の學と云ひ直さなければならなかつたのであらうか。それには種々なる理由が考へられる。先づ十八世紀の自然科学は物と云ふ實體概念を排斥して物理現象相互間に成立する法則的關係の體系を作ること成功した。物の運動は物と云ふ實體が有する力の働きとしてではなく、運動と云ふ現象を支配する法則的關係として理解されるやうになつた。これと同様に心理學でも精神と云ふ實體概念を排斥して、そこに精密科學としての心理學を樹立することができないであらうか。精神

現象を精神と云ふ實體が有する種々なる能力の働きと考へれば、我々が歩くのは步行能力により、我々が計算するのは計算能力によると云ふことになつて説明にも何ものならない。これでは心理學は遂に自然科学の如き有用なる學問にはなれないであらう。さう云ふ考へが所謂能力心理學に對する反對となり、精神と云ふ實體概念の排斥となつて現はれたことは、心理學史を繕くものゝ遍く知るところであらう。併し實體概念としての精神を排斥することゝ、對象領域の指標としての精神の概念を廢棄することゝは必ずしも同一ではない。説明概念としての能力を否定することゝ、變化の原理としての力の概念を維持することゝは必ずしも紙觸しない。物理學に於てもその對象領域を劃するためには物と云ふ概念を必要とし、物理的變化の充足理由として力と云ふ概念を放棄することは現在に於てもなほ可能ではない。従つて實體概念としての精神の否定も、能力心理學に對する反對も、それ自身としては誠に正常であつたと云ふことができるけれども、併しそれ故に近世心理學が精神と云ふ語をタブーとし、一般的に能力と云ふ文字を抹殺しようとしたと云ふことは到底行き過ぎの誹りを免れないのである。

更らに心理學を精神活動の學と定義するとしても、そ

れは現實には身體の活動から區別することが不可能であるやうにも見える。神經系統の活動以外に果して精神の活動なるものが存在するであらうか。凡ゆる精神の活動は神經生理に規定されるとすれば、精神活動の説明は結局生理學の問題ではあるまいか。然らば心理學はキヤバニスやコントが考へたやうに生理學の一部門となり、その獨立性を主張することができない。筆者の見解に於てはそれは結局杞憂に過ぎないと思はれるのであるが、かゝる杞憂から一方にはデイルクイに於けるが如く心理學を以て精神科學の基礎學であると云ふ思想を生じ、他方に於てはヴントに於けるが如くそれを意識の學であるとする潮流を生じたのである。前者の考へ方が不適當であることを感じない。後者の考へ方については次ぎの如き事情が注目される。精神の活動が生理學の原理によつて説明されるとすれば、心理學は生理學になるか、若し又その獨立性を主張せんとするならば、そこに生理學では取扱はない對象領域を見出さなければならぬ。生理學で取扱はない對象領域は意識であると考へたのがヴント等の思考順序であつたらう。然るに前にも述べたやうに、意識は心理學の對象としては廣きに過ぎ或は狭きに過ぎる。

思考の心理學的意義

而も意識は個人の主觀的事實であつて、かくの如き對象に關踏してゐたのでは心理學は遂に客觀的科學たることをえないであらう、五十年の長きに互つて心理學が何等有效なる知見を獲得しえなかつたのは實にそのためであると云ふのが、かのワットソンの行動主義を度外視すべしと云ふ狹義の行動主義心理學を主張した理由であつた。ワットソンの行動主義は一方には前世紀末ドイツの生理學者、ベーテ、ペール、ユクスキユール等が同様の主旨の共同宣言を發表したのに刺戟せられ、他方にはロシヤに於けるパヴロフ一派の條件反射學の業績に刺戟されたものと思はれる。併し意識はそれにも拘はらず精神現象の重要な部分を占めるものであることも亦否定することのできぬ事實である。現代の行動主義は多く意識を排撃しない。唯それを精神活動の一種と認めるのである。意識を精神活動の一種と認め、それを意識には直接現はれない行動と共に心理學の對象とするならば、心理學は生物の行動一般を取扱ふ生物學や、その身體的行動を取扱ふ生理學から區別することができないのではあるまいか。筆者は最廣義に於ては心理學は結局生物學の一部門であることを卒直に認むべきであると考へてゐる。併しそれは決して心理學に對して獨特の領域がないと主張

するのではない。生物の行動中には特にその身體に關するものと、精神に關するものとを區別することが出来る。兩者を支配する法則が同一であるか否かは研究の結果初めて分かることであつて、それまでは夫々の事實に即して一方では身體的行動の法則を求め、他方では又精神的行動の法則を求めることに何等の差支へもない筈である。我々の知識が進まない先きに超越的な立場から兩者の結果を豫想するのは青年的なビュームに過ぎない。素より學問は互にその業績を以て助け合はなければならぬのであるから、それらがその城廓を守つて孤立する必要は少しもない。むしろ我々は凡ゆる事象が極めて類似の構造を有することを屢々經驗するのであつて、いつかは我々の學問が統一的な視點から統合される時代の來ることを期待してもいゝのではないかと考へてゐる。併し現在に於て我々に課されてゐる課題は自らその學問の領域内に於て忠實なる研究を進める以外にはないと云ふことを忘れることができないのである。

かく、精神の活動は一般的な生物學的行動の一種であるとすれば、その重要な特徴はそれが一つの目的々聯關を構成してゐると云ふところに求められる。(それが更らに生氣論的に解釋すべきであるか、或は機械論的に

説明し盡すことができるかと云ふことはこの問題ではない。)即ち精神の活動は或る動機から出發してその目的達成に終る一つの有機的體制を構成してゐると云ふ點のみはかゝる目的々聯關から離れて、我々のうちに起るところを傍觀者の如く眺めてゐるやうにも見える。この故にカントはそれを無關心と考へた。併しこれは感情の派生的機能であつて、元來はやはり目的々活動が我々に及ぼす影響に對してそれを報告する役割を演じたものであらうと思はれる。従つてそれは知覺が外的な情報機關であるのに對して内的な情報機關であると云ふことができる。目的々活動は先づ我々の欲求とそれを充たす材料とそれを獲得する手段とによつて構成される。欲求の問題は意志心理學の問題であつて我々の問題からは遠い。材料は結局我々の環境であつて、これは欲求及び手段に對して相對的なものであるが、素より精神的活動プロパアには教へられない。そこで我々の問題たる思考作用はこのうち手段に關するものであると云ふことになる。然るに手段は思考作用のみに限られない。知覺も手段であり、記憶も手段である。即ち知的活動一般が手段となるのである。のみならず身體的運動も亦目的獲得の手段で

あることに變りはない。そこで手段には大別して運動體制と知的體制との二つがあることになる。この兩手段の特徴は如何なる點に求むべきであらうか。

元來目的々活動は我々が或る課題的状況に當面して、かゝる状況に對して自らを順應せしめ、或はその状況を自らに順應せしめる反應である。このうち外界に對して自らを順應せしめる反應は外界を自らに順應せしめる反應と同様に身體運動としても營まれ、又自らの内部のレギュレーションとしても行はれる。何れも何等かの知覺を機縁として解發されるのであるが、かゝる知覺は外部知覺にしる内部知覺にしる、必ずしも未だ意識的であることを必要としない。又それらの反應は何れもその遂行機關を必要とするわけであるが、アメーバの場合などを考へると、元來動物の細胞は全體として外部的運動と内部的統制との兩機能を兼ね備へてゐるものと思はれる。然るに發達の後の段階に於ては兩機能に對する遂行機關の分化が起り、哺乳動物に於ては外部的運動は主として腦脊髓神經系に支配される有筋筋の體制によつて營まれ、内部的統制は主として植物性神經系に支配される平滑筋、腺、粘膜、血管等によつて營まれるやうになつてゐる。併しそれと同時に高等動物に於ても案外動物全體の全體

活動が猶ほそこに重要な役割を演じてゐることは、近頃胎兒の反應に關する研究や、大脳生理の領域に於ける反定位說的業績によつて明らかにされた。遂行機關の活動はその全體作用を保持しながら、而もそのうちに分化分節せる部分作用を可能ならしめるやうな方向に向つてその機關の性能を變容して行く。

これと平行して生物進化はその行動を謂はゞ別の次元に於て發達させた。それは行動の間接性の増大と云ふことである。行動の間接性の増大は如何にして可能なのであらうか。進化の低い段階に於ては動物は對象の要請に對して直接その遂行機關による反應を解發する。進化の高い段階に於てはその場合に應じてかゝる反應を保留することが出来るやうになる。これは遂行機關に對する準備機關の成立によつて初めて可能であると云はなければならぬ。遂行機關に對する經驗の影響は機關そのもの働きを變容するやうに働く。準備機關に對する經驗の影響は遂行機關の性能を變化することなく、それを適當の時期に發動せしめるやうに働くのである。前者に於ては經驗は恰も血や肉のやうに機關そのものうちに吸收せられ、機關そのものを構成する。後者に於ては經驗は恰も血糖や脂肪のやうに組織から離れて蓄積されるのであ

る。前者に於けるが如き經驗の影響を我々は習慣と名づけ、後者に於けるが如きそれを我々は知識と名づける。習慣は機關が働く場合にはそれに従ふのを必然とするのに對して、知識は唯遂行が不可能な場合の救援をなすに過ぎない。習慣の構成は連鎖的であり、繼時的であり、一方的であるのに對して、知識の構成は原則的には文脈的であり、同時的であり、多方向的である。素より習慣の構成される過程には前進のみでなく、後退もあり、一方的のみでなく、多方向的な彷徨もあり、醗酵の時期も認められる。従つて習慣が單なる機械的聯合によつて構成されるものではなく、一種の體制化の過程によつて構成されるものであること、又多くの機械的共働を必要とするものであることは、種々なる研究によつて明らかにされた。併しそれが完成された形に於ては上述の如き構造を示すと云ふことは否まれぬところであらう。このことは所謂知的操作についても、それが操作である限り、身體的操作、即ち動作の場合と異なるところがない。ゼルツは知的操作が刺戟狀況に對して準反射的對應をなすことを説いた。知的操作を反射と比較することは知性の創造性を無視するやうな印象を與へるけれども、操作は遂行機關として習慣の法則に従ふと云ふことには深い

洞察がその基礎にあることを思はせる。それが屢々創造的效果を將來するのは實は豊富なる知識をその材料として駆使するところの二次的操作であるからに他ならぬ。然らば知識は如何にしてその間接性を獲得するのであらうか。直接的生命の流動は河水の流れるが如く瞬時も止まるところがない。そこに波を立て渦を巻いても、それらは忽ちにして再度元の流のうちに姿を没し去るのである。これを止めるものは反省の機能であり、意識の機能であると云はなければならぬ。意識は通例極めて主觀的な機能であると云はれるが、この意味に於ては實に客觀化の基礎であると云ふことができる。素より反省により意識によつて生命の流れが一時止められても、若しそこに命名の機能が働かなければ、止められた姿は極めて流動的なものに過ぎないであらう。それは夢中の表象の如く、何時の世のものとも知れず、或は兄であると共に父であり、父であると共に戀人であるが如きものと思はれる。然るに名が與へられれば、それは獨立の個體として、時の破壊作用に對抗し、長く我々の記憶に止まり、知識の一員としてその地位を確保することができる。動物に反省の機能、意識の機能があるか否かは我々の知りえないところであるが、上述の如き漠然たる表象ならば、

既にキウヴィエがそれを夢みる心と名づけたやうに、彼れらに於ても見出しうるのではあるまいか。併し動物に命名の機能がないことは明らかである。従つて彼れらの記憶は知識と名づけるに價しないほどその範圍が極めて狭い。尤も動物にも言語的機能と相似したものゝ存することは多くの觀察によつて證明されたと考へることができる。例へば迷路の岐路に於て左せんか右せんかを決定するのは岐路に於ける何等かの手がかりであらう。かゝる手がかりは例へば右すれば餌が獲られると云ふ経験の記號であり、従つて言語の代表機能と相似のである。或はそれは記號であつても單なる聯合によつて生じたものであつて、言語的な象徴と同一視することはできないと云ふ人があるかも知れぬ。併しその相異はむしろ程度上のものではないだらうか。記號と象徴との區別は種々考へられるが、そのうち最も重要な徴標となるものは記號が個物を指向し、言語的象徴は通例概念を指向すると云ふところに存するであらう。然るに動物の岐路に於ける手がかりは單なる個物の記號ではないやうに見える。それは動物に於ても概念的なものが認められると云ふ事實によつても裏書きされる。概念の特徴は記號によつて個物でなく一般を指向するところにあるとすれば、それは

結局類似の個物に對して同様の反應を替むと云ふことに過ぎない。動物の等價反應なるものはかゝる反應なのであるから、動物の行動と言語的な概念的行動との間には本質的相異はないと云へるのである。一般に言語的な象徴機能よりも簡単な構造を有すると考へられる暴風標識の如きものは、言語的習慣によつて構成される命名作用に依存するもので、むしろ高次の機能、或は省略的機能であると云はなければならぬであらう。又指示身振りの如きが動物に於ては發達してゐないところを見ると、個物の指示は一般の理解よりもむづかしいのである。それは兎に角動物に於ては象徴機能は充分には發達してゐない。従つて彼れらの知識は極めて貧弱である。豊富なる知識が成立するためには前にも述べたやうに、命名機能によつて經驗が個體化せられ、それが既得の知識體系中に攝取されて、その體系を成長せしめることを必要とする。命名作用がなければ個々の經驗はよし意識によつて引き留められても、恰も砂を以て家を造らんとするが如く、或る高さまで積めば崩れ落ちる。命名作用は砂を煉瓦に造る作用の如きものである。それが知識の分節を可能にし、構造を可能にする。素より知識の構造は單なる積み重ねではなく、やはり一つの構造であり、體系であ

ること、習慣の構造と異なるところが無い。その成立には既成知識による個々経験の消化を必要とし、體制化を必要とする。併しそのうちに於ては個々経験は比較的な獨立性を有し、習慣體制の場合に於けるが如く機關そのもの、全體の構造中に融け込んでゐるのではない。こゝに兩者の著しい區別が認められる。かくて知識は直接的な生命の流れからそれ自らを抽出し、それと比較的廣い間隔を保つて、間接的な準備活動の機關となることのできるのである。

以上我々は同じ手段のうちにも直接的な一次的な遂行活動と、間接的二次的な準備活動の存することを説いて來たが、これは我々の問題たる思考活動がこの知識を媒介とする二次的な準備活動であることを明らかにせんがためであつた。素より思考活動もそれが活動である限り、それを反復遂行することによつて習慣を構成する。従つてそれは習慣と全く關係のない活動ではない。併しかゝる習慣的思考は通例再生的思考と呼ばれ、生産的思考からは區別される。而して生産的思考こそは思考作用の本來と考へられるのである。本來ではあるが、それは決して最も頻繁に行けると云ふことではない。人世に於て眞に生産的な思考活動が營まれる場合はむしろ極めて稀

れであると云ふこともできる。譬へ稀れではあつてもそれが行はれるとするならば、かゝる生産的思考は如何にして可能なのであらうか。知的操作はそれが反復されば習慣的操作となり、刺戟狀況に對してゼルツの所謂類反射的對應をなすに至ることは前にも述べた。併しかゝる操作は又我々の意識に於て把握せられ、心的内容として知識體系のうちに攝取される。然るに知識に於ては種々なる内容は種々なる關係を作り、體系を作り、そこに新らたなる性質が生産される可能性が存するのである。

これは精神活動の根本法則であつて、例へば單なる直線の結合からそこに三角形なり四角形なりと云ふ新形態が生産されると同様の關係であると云ふことができる。ゼルツの如きは生産的思考の可能性を偶然的機能に求めたが、新性質の生産は偶然たると意圖的たるを問はない。素より我々はそこに如何なる新性質が生産されるかを適確に豫想することはできないけれども、而も豫期せられたる方向に向つてそれが實現されるであらうことを豫期することは必ずしも不可能ではないのである。かく思考活動は知識的體系を有するものに於てのみ可能である。動物に於てはその行動は主として直接的な動作によつて營まれるのであるから、眞の意味に於ける思考活動

は不可能であるとも云へる。併し前にも述べたやうに、彼れらに於ても言語的ではないが、知識に類似せる體系は發達してゐる。この意味に於てそこにも思考活動に相似的なものがあると云ふことは云へるであらう。幼兒はその言語期以前に於ては動物と同様に凡ての行動を直接的な動作によつて營むのであるが、言語期前後からそこに漸次知識を集積して行く。動作期から言語期に至る變化をクラパレードは意識の介入 (*prise de conscience*) と名づけ、ピアジエは基礎工事の法則 (*loi de décalage*) と呼んだ。かゝる基礎工事の上に言語的知識が可能になり、それより數年の後に直接的動作の體系は言語的動作の體系に敷き寫しされると云はれる。併し實際に於てはこの敷き寫しが完成するのは青年期以後に屬するものゝやうである。初めは言語的動作は直接的動作と比較的遊離して發達する。兩者の完全なる調和は必ずしも容易な業ではない。或る人は成人に至つてもこの調和を完成することができない。これは唯不斷の努力によつてのみ特定の個人に於て到達されるものと云ふべきであらう。尙ほ言語的知識は更らに科學的知識に敷き寫しされるのであるが、これについてはこゝには述べない。

さて我々は次ぎに思考活動と他の精神活動との關係を

簡単に解明して置くことにしたい。アリストテレスは人間の能力を知性と意志とに二分することを不當であると、凡ゆる能力に意欲の參與を主張した。又テーテンスの如きは悟性を内在的活動と云ひ、意志を超越的活動（即ち外界に働きかける活動）と定義して、ウントの内部意志動作（即ち思考）及び外部意志動作の二分法に對する魁をなした。その後思考活動に意志的契機が極めて重要な役割を演ずるものであることは特にアツハによつて強調される。かく意志と思考との間に密接な關係があることは多くの心理學者によつて注目された。併しそれはその働きが單に外部に働くか、精神の内部に止まるかと云ふやうな表面的な差別であらうか。意志を廣義に解釋すれば、アリストテレスの説くやうに、如何なる活動もそれを缺くことができない。意志を狹義に解釋してアツハの云ふやうに「自分はほんとに意志する」と云ふ意識を伴ふ場合に限定すれば、眞に生産的な思考と雖もかゝる意識を伴ふ場合と伴はぬ場合とがある。かゝる意識はむしろ困難なる事態に對する感情的反應とも云ふべきものであらう。外部意志動作と内部意志動作との區別は上述せる直接的遂行活動と間接的準備活動との區別に該當するもので、それは運動的操作即ち動作と、知的操作

即ち思考との區別であり、意志と思考との區別ではない。兩者は同じ全體的活動を異なる視點から、従つて又異なる位相に於て眺めたものに過ぎない。

思考と知覺との關係について云ふと、ピネはその「推理の心理」に於て、オレンヂの知覺は過去に於けるオレンヂに關する經驗の再生を必要とし、そこに現在の經驗との類似を再認することを必要とするものであるから、知覺は決して直接的ではなく、この點に於て思考的認識たる推理作用と極めて近似せるものであることを指摘した。記憶が感覺に對する不可缺の條件であることは既にホッブスによつても強調されたところであるが、それと思考との類似を明らかにしたことは確かにピネの創見であると云ふことができる。併しオレンヂ色の知覺が成立するためには單に過去に於てその色を経験することを必要とするのみならず、他の凡ゆる色に對する體系的知識を必要とする。色の體系を離れては赤は赤たることをえない。フギエは感覺機關の存在が既に有機體の目的々活動の結果であることを強調したが、近頃ラッシレイは本能的行動の根柢にも亦生來的な知覺體制の存在が豫想されることを明らかにした。かゝる知覺體制なるものが我々の所謂知識體制と同様のものであるか、或はもつと

習慣的構造を有するものであるかは明瞭でない。恐らくそれは知識と習慣との未だ分化せざる根本的機能の所産であるのだらう。従つて知覺と思考との相似性を主張することは正しい。併しそこから直ちに知覺と思考とは同一であると云ふならば、それは知覺概念の、従つて又思考概念の不當なる擴充であると云はなければならぬ。

知覺と思考との區別は、例へば前者が瞬間的な作用によつて完成されるのに、後者は多少とも複雑なる時間的經過を取るところに求められた。併し知覺も不明瞭な對象の知覺に於けるが如く或る程度の時間的經過を示すこともあり、逆に思考と云ふべき活動も極めて直接的瞬間的に完成される場合も認められるのであるから、これを以て兩者の區別的徵標とすることはできない。知覺は受動的であり、思考は能動的であると云ふ説も、デカルト以來ボネやテーテンス等によつて知覺の能動性が強調されてゐる通り、これは單に比較的な意味で云ひうるに過ぎないであらう。知覺は事物の認識であるのに對して思考は關係の認識であると云ふ説も、關係を含まぬ知覺はないと云ふことを考へると必ずしも明瞭ではない。知覺が關係を含むと云ふのは客觀的な意味に過ぎないと云つても、關係の認識に於て關係が必ずしも意識されるので

ないことを思ふと、これもやはり十全なる區別的微標とはならない。むしろ知覺と關係の把握とに於ては最初からその目標を異にすると思ふべきであらうが、併し思考作用は必ずしも關係の把握にのみ向けられるものではないから、若しさう考へることが正常であるにしても、それは知覺と思考一般との區別にはならないであらう。これに關聯して思考が成立するためには先づ知覺を必要とするのであるから、知覺は一次的機能であり、思考はその上に立つ二次的機能であると考へる説がある。我々も先きに思考活動の成立條件として欲求と並んで狀況の知覺を必要とすると説いた。併しこれはむしろ思考成立の論理的前提であつて、心理的にはそこに疑問狀況の存在と云ふことが強調せらるべきであらう。然るにかゝる疑問狀況は必ずしも狹義に於ける知覺として與へられるのではない。無意識的に働くこともあり、感情的に働くこともある。のみならず知覺と云ふことを、あれは人であらうか熊であらうかと云ふやうな辨別的意識にも適用しうるとすれば、かゝる場合には明らかに一種の疑問狀況が存在するのであつて、これは思考的状況と何等異なるところがない。知覺が成立して然る後に思考作用が働くのではなく、兩者はともに或る事態の成立を前提とする

點に於ては同一であり、一方はその事態の直接的認識をその目標とし、他方はその事態を更に加工するやうな經過を取る。併し何等かの事由によつて知覺が直接その終點に到達せず、そこに加工的經過が介入するやうな場合には、我々はそれを認識的な思考と名づけるのを適當と考へるのであるが、かゝる過程の出發點及び終點となるものは單純なる知覺の出發點及び終點に對して何等本質的な相異を示さない。従つて知覺とかゝる場合に於ける思考とは唯それらが加工的經過をとるか否かに存すると云はなければならぬ。換言すれば知覺が成立して然る後に思考が働くのではなく、兩者は同じ認識作用が異なる經過をとる場合に關する區別に過ぎない。尤も思考作用は認識をその目的とするものゝみに限らない。例へば或る事態を認識してこれを適當に表現せんとする活動は一種の思考作用であるが、その目的は適當なる表現の發見にあつてそれを認識と呼ぶことはできないであらう。従つて思考と認識を同一視する考へ方は思考の概念を不當に局限するものと云はなければならぬのである。

思考が言語機能を必要とするのに、知覺は直観的段階に於て營まれると思ふ説は筆者の立場に最も近い。筆者は思考の特徴を或る課題狀況に對する有機體の行動に上

述の如き知識體系の介入するところにあると考へてゐる。かゝる知識體系の構成に言語機能が極めて重要な役割を演ずることは云ふまでもない。併しそれは必ずしも不可欠の條件ではないのである。上にも述べたやうに動物にも言語以前の準言語的機能があり、かゝる機能は人間の知識體系構成の基礎をなしてゐる。従つて思考の特徴を言語機能の介在に求める見解は狭きに失するものと云はなければならぬ。況んやそれを發音機管の微弱なる活動に歸着せしめんとする説は到底それを信ずることができない。我々はもつと廣く思考を以て代表機能、特に象徴機能の媒介による課題解決の過程と解釋すべきであると考へる。

その他の精神機能と思考との關係についてはこゝに餘り多くを語る必要はないであらう。通例想像と思考とは區別されるけれども、何か新しい思想の結合を構成せんとするやうな場合ならば、それは思考過程と異なるものではない。思考は一般的に云へば論理的内容を有するものに限られるわけではなく、論理的思考が可能になるのは有效なる手段の體系が構成された後のことに歸する。即ちそれは思考技術習得の結果に他ならぬ。白晝夢の如き想像過程は心的緊張の極めて低下せる場合に起るもの

で、そこでは心的過程の合目的性が後退し、習慣的機制の盲目的活動が行はれるやうになる。認識作用と思考作用とも同一視されることがあるが、前にも述べたやうに前者は後者の一種に過ぎない。思考作用は種々なる課題状況に於て發せられるものであるが、認識作用はその課題状況が客觀的事實の認識に向けられてゐる場合に他ならぬのである。記憶と思考との關係も亦密接である。併しそれは思考の條件ではあつても思考それ自身ではない。而も記憶のうち思考にとつて重要なのはその習慣的機制ではなく、知識體制であることは繰返して説いた。思考と感情との關係についても或る學者は感情的思考なるものを立て、その緊密性を強調してゐる。素より思考作用は我々の欲求から出發するもので、その動機付けに於て感情的要因が重要であることは云ふまでもない。又それが知識に訴へる場合にも、知識中には感情的體驗の莫積がその重要な構成要素として働いてゐると考へられるのであるから、そこにも兩者の密接な關係は否定すべくもない。併し所謂感情的思考なるものはやはり論理的思考に對立するものであつて、思考を論理的と考へる先入主によつて、非論理的な、即ち通例の思考作用中特に感情的着色の強いものを抽出してかく名づけてゐる場合が多

いのである。

二、思考の構造

思考活動は通例概念、判断、推理の三機能に區分される。併しこれは論理學上の區別であつて、心理學にとつては必ずしも適當でない。何故なら心理過程としては判断や推理を前提としない概念はなく、逆に所謂概念を含まぬ判断や推理が可能であるとは考へられないからである。従つて心理學に於て概念、判断、推理等の概念を用ひても、それは論理學上の意味とは全く異なる内容を持つものと云はなければならぬ。論理學では概念の内包と外延とは一定不變でなければならぬ。判断は二つの概念の關係であり、推理はかゝる判断の變形か、或はその結合でなければならぬ。然るに實際に於ては一つの思想は渾沌たる未分化の状態に於て生れ、次第にその形を整へるが、併し或る場合には又渾沌たる姿のまゝにその任務を終り、他の思想にその場處を譲ることが尠なくない。これに反して明確なる言語的表現を與へられるのはむしろそれを書き留めるためか、或は人にそれを報告せんとする場合に限られる。前にも述べたやうに心理學的に云へば思考活動は或る課題状況に對して既得の知識を適用し、それを解決する過程である。従つてその理解は一方

には先づかゝる知識の構造を明らかにし、他方にはかゝる知識が成立する過程及びそれが適用される場合の法則を明らかにすることによつて獲得される。前者は思考の靜的考察であり、後者はその動的考察であると云ふことができる。靜的考察は從來概念及びその體系の問題として取扱はれたところであるが、上述の如く概念と云ふ概念は論理學的色彩が強く、且つ變化し難き恒常的な内容を有するものと考へられ易いから、心理學に於てはそれを「意味」と云ふ概念で置き替へるのが適當ではないかと考へられるのである。併し意味の概念も亦極めて多義的であつて、それを心理學上の用語として使用するためには先づその意味を充分に反省して置く必要があると思はれる。試みにC・K・オグデン及びI・A・リチャアツがその「意味の意味」なる著述に於て、從來の諸學說を綜括したところによると（彼れらはそのために Mind, 1920; Brain, 1920; Essays in Critical Realism, 1920）に掲載された諸家の學說を参照してゐる、意味の意味は次ぎの如き十六の型に纏められた。即ち一、それ以上何ものにも歸着せしめることのできな特異的内容であるとするもの、二、それ以上何ものにも歸着せしめることのできな特異的な關係であるとするもの、三、辭書中に

興へられる他の表現に過ぎぬとするもの、四、語の内包であるとするもの、五、語によつて指示される本質であるとするもの、六、事態の中に投射された活動であるとするもの、七、(a) 企圖された事態であるとするもの、(b) 企圖する意志であるとするもの、八、一つの體系中に占める位置であるとするもの、九、未來の經驗に對する實際的效果であるとするもの、十、命題に含まれる理論的な歸結であるとするもの、十一、事態によつて惹起される情緒であるとするもの、十二、特殊的關係、例へば寒暖計の上昇と氣温の上昇との關係、を有する兩項の一方であるとするもの、(a) 過去に於て經驗された事態が聯合的に惹起されたものであるとするもの、(b) 單に事態が指示する他の事態であるとするもの、若しこの場合語の使用者を考慮に入れるならば、十三、語の使用者が事實その語によつて指示する他の事態であるとするもの、十四、語の使用者がその語によつて指示するもの、考へてゐる他の事態であるとするもの、十五、多くの使用者がその語によつて指示する他の事態であるとするもの、更らに語の聽取者を考慮に入れるならば、十六(a) 聽取者が事實その語によつて指示する他の事態であるとするもの、(b) 聽取者がその語によつて指示するもの

へてゐる他の事態であるとするもの、(c) 聽取者が使用者がその語によつて指示すると考へてゐる他の事態であるとするもの。而して彼れらによれば意味體驗の本質は彼れらが記號狀況 (Sign-situation) 若くは象徴狀況 (Symbol-situation) と名づけた狀況に於て、我々が記號若くは象徴を認識し、それによつて過去の同様の經驗を再生してその狀況に順應するところにあると主張された。記號狀況若くは象徴狀況と云ふのは、例へば旅人が「グランチェスタア道」と云ふ路標の前に立つやうな場合で、そこには Sign or Symbol (文字)、Referent (格蘭チェスタアと云ふ場處)、Referents (旅人の體驗) と云ふ三つの因子が認められる。醫者が患者の脈を見て病氣と診斷するやうな場合を特に記號狀況と云ひ、言語若くはそれに類似せる圖解、身振り等による場合を象徴狀況と云ふが、それらは單なる知覺狀況に於ても同様の構造が認められると云はれた。彼れらの説は結局上述十二番に包攝されるもので、使用者又は聽取者を考慮に入れるならば、夫々十三番又は十六番(a) に相當するのである。

オグデン及びリチャアズは言語學者としての立場から當然語義と云ふ意味での意味をその中心問題としてゐる

わけであるが、この分類中には他の立場からの意味の意味も含まれてゐる。それらの多くは心理學の立場から云つても興味ある問題を提供するものではあるが、今こゝにその一々について考察してゐる暇はない。心理學に於て最も頻繁に問題とされる意味は意欲の對象に關するものと、事態の文脈中に認められるものと二つである。云ふことができる。意欲を充たすものは我々にとつて意味があると云はれる。又或る事態中にはその事態に備はる文脈によつて意味が生ずると云はれる。前者は價值と云ふ概念（この概念も極めて多義的であるが）に相當するもので、後者はこれを事理と名づけることができるであらう。事理と云ふのは例へば三角形は圖形として他の不規則のものよりも意味があると云ふやうな意味に考へたい。文章がその文脈によつて意味を生ずるのも文章自體に備はる何等かの規則性に規定されるためである。ウエルトハイマアはかゝる規則性を事態に内在する内的必然性であると考へ、これを意味 (Sinn) と名づけた。これは歴史的に見るとピタゴラスのロゴスやスピノザのラチオに相當するものであると思はれる。併し心理學的に考へると意味は我々の欲求それ自身にあるのである。對象の事理そのものゝうちに見出されるのではなく、欲求が事

理に従つて充實されるところに成立するものであることが注目される。換言すれば意味は價值と事理とを媒介するものによつて擔はれる。而してかゝる媒介者は我々の手段的行動、即ち知的活動に他ならぬ。知性は實に價值と事理とを媒介して欲求の充實を將來する手段である。然らばかゝる行動によつて擔はれる意味そのものは果して何者であらうか。それは恐らく行動がその内的必然性即ち行動の場に備はるやはり一種の事理に従つて行はれると云ふことであると云はなければならぬのではあるまいか。併しこの意味に於ける事理は心理學にとつては超越的である事態そのものゝ事理ではありえない。それは有機體と環境との交互作用によつて生ずる心理物理的な場に備はる事理なのである。換言すれば有機體は環境の事理に應じてその欲求を實現するに最適當の手段を選択するのであるが、かゝる手段的行動の合法性こそ心理學的な意味に於ける意味であると云ふことができる。

この意味に於ては知覺が既に一つの意味の負荷者である。オレンヂを見てそれをオレンヂであると知覺するのは、オレンヂに備はる客體的性質を何等かの意味に於ける欲求の實現に對して媒介することである。オレンヂそれ自身には意味はない。欲求それ自身にも意味はない。

オレンヂを欲求に媒介する知覚活動と云ふ我々の行動によつて意味は始めてそこに發生するのである。従つて意味は行動のうち内に存在するものと云はなければならぬことがわかるであらう。これはオグデンの旅人が路標に對する場合にも、亦トルマンの鼠が岐路の特徴に反應する場合にも本質的に異なるところがない。この場合知覚は右折若くは左折の運動を規定する一つの意味の負荷者であり、右折若くは左折の運動も亦直接目標を媒介する他の一つの意味の負荷者となる。元來意味は後者の意味に於ける如く直接的な動作によつて擔はれたものであらう。

知覚が意味の負荷者となりうるのは、それがかゝる直接的動作の代表であるからに他ならぬ。然るに知覚は更らに記號によつて代表せられ、そこに間接的な言語的知識の體系が成立する。従つて言語の意味が問題となる場合にはその代表の機能が強調せられ、單語に對して恰も一定不變の意味が對應するかの如くに考へられ易い。併し心理學的に見ると言語の意味も元來は一つの全體的な行動の代表であつたことは、それが幼児に於て發現する初期に於ては、所謂一語文として一つの行動全體を表現するものとして發生することによつても想見するに難くない。それが行動の法則と言語それ自身の特性によつて

漸次分化分節して種々なる文法的構造を構成するやうになる。單語に特定の意味が對應するに至るのはいかゝる發展の結果に他ならぬのである。而も心理學的に云へばかゝる發展の後の段階に於ても單語に安定的な意味を對應せしめることは極めて危険であると云はなければならぬ。この點については併しこゝに詳説してゐる暇がない。

扱つて知識の構成は初め甚だ漠然たる性質の抽出によつて開始される。行動はその低次の段階に於ては極めて無形態的な非連續態であり、その出現の後には再度渾沌たる生命の流れのうちに解消し去るものであることは前にも述べた。これを獨立の經驗として把持するためには反省の機能が必要とし、意識の機能が必要とし、代表の機能が必要とし、體制化の機能が必要とする。科學的な概念構成の過程に於ては直接的具體的な個別的知識から出發して、間接的抽象的な一般的知識が獲得される。然るに原始的な知識構成に於ては最初に成立する知識はやはり直接的具體的個別的ではあるが、それと同時に極めて包括的一般的な手段に關する知識であつて、それが漸次限定せられ、分節せられ、體系化されて行く。即ち非限定（アペイロン）から限定（ペラス）へ進むのである。特殊はその結果として成立する。例へば「動いてゐるう

ちに食物に行き當る」と云ふアミーバ的手段が「頭の上を動くものに飛びつけば食物が獲られる」と云ふ蛙的手段となり、更らに人間に於けるが如き種々なる食物の區別が可能であるやうな知識に發展するのである。而してかゝる發展の過程を支配する原理も論理學で云ふやうな類同性の抽出の如きものではなく、むしろ差異性による分化である。同じものならば同じ反應をするのではなく、ちがつてゐなければ同じ反應をする。動作の世界は一方向的前進的であつて後退することがない。それが失敗するにあつて我々は初めて自らの動作を反省する必要に迫られる。そこに知識の濫觴があり、その間接性が胚胎する。類同性による概括の如きもかゝる反省の結果一つの比較的安定せる概念が構成され、別々に個物を把持する能力が發達した後、それを根據として類似現象の整理綜合が意圖されるに至つて初めて現はれるものなのである。かゝる安定概念の成立は主として命名と云ふ代表機能によつて可能となることについて以前にも述べた。併しそれ以前にも或る種の代表機能が働かぬわけではない。「動くうちに食物に行き當る」と云ふ手段は全身的な構へによつて代表される。「頭の上を動くものに飛びつけば食物が獲られる」と云ふ概念は恐らく視覺的運動

表象によつて代表されるのであらう。さうでなければ一般的に云つて學習は不可能な筈だからである。併しこの種の記號は猶ほ頗る不安定であると考へざるをえない。動物の生活が簡單であり、その欲求體系が分化してゐない間にかゝる比較的直接的な記號で充分であらう。併し生活が複雑となり、欲求體系が分化して來ると、そこに種々なる選擇可能性が現はれて、かゝる選擇の據點となるものは相當安定せる構造を有するものであることを必要とするやうになる。この役割を引受けるものが言語的記號に他ならぬ。

言語的機能が發達せぬ動物に於ては、代表機能は身體的構へによるか、感情的警告によるか、或は感覺的表象によるかの何れかであらう。このうち前二者は極めて粗雑であつて複雑なる事態の代表となることはできない。感覺的表象も亦黒と白、青と赤と云ふやうな區別は頗る明瞭であるやうにも見えるが、かの知覺的恒常現象の事實が教へるやうに、その生理的基礎は極めて相對的であり、且つ多くは偶有的屬性に過ぎぬものであつて、それによつて恒常的に個物を代表せしめることはむづかしいのである。素より感覺的屬性が結合すればその構造は安定化されるが、それでは個物の代表としては充分であつ

ても、類の代表としての價值は減殺される。そこで先づかゝる個物を空間的圖式に配分することによつてそこに秩序を齎らさんとする努力が行はれる。そこに援用されるものは動物の特性に従つて、例へば鼠や豚の如きに於ては運動空間的な圖式であり、馬や猿の如きにあつては視覚空間的な圖式であつて一樣ではないが、併しこれらの圖式も記號を安定化する程度に於て言語的機能には遙かに及ばないのである。所謂遅延反應實驗に於て動物をして、例へば明暗の辨別に習熟せしめた後、即時的反應を抑制してそこに反應遲滞の時間を置かせると、その遲滞可能な時間は極めて短かい。或は所謂多様選擇反應實驗に於て數個の選擇枝を設けると、動物の反應は忽ち混亂せしめられる。これらの場合人間に於ても若しそこに言語的機能が働かなければ恐らく同様の混亂が起るであらうことは容易に想像される。事實言語的命名が不可能な視空間的配置に於て、チムパンジーの能力が人間のそれよりも遙かに優秀であると云ふやうな場合も見出されてゐるのである。更らにこの記號の安定度と反應の間接性との間にも極めて密接な關係があることは云ふまでもない。動物に於ても或る種の間接的行動は可能であるやうに見える。トルマンは犬が主人の乗つて歸る自動車の

音を聞いて門前に出て待つ行動を間接行動の例として擧げてゐる。或はミュンジンガアの如きは動物が選擇反應をする以前に刺戟の前に止まつて頭を右往左往せしめる行動を代理的試行錯誤(VTE)と名づけ、かゝる行動を伴ふ動物の作業はその能率が高いことを見出した。併しこれは言語的機能を以てするマツハの所謂思想實驗の能率には及ばないであらう。眞に間接的な行動は言語機能を俟つて初めて可能であると云はなければならぬ。

かく言語は代表機能ピア・エクセレンスであるけれども、それが従ふ法則は他種の代表機能と本質的に異なるものではない。代表機能が働くためには經驗は先づ欲求體系に對する重要性と知覺體制に對する顯著性の原理によつて背景と圖柄とに分節せられ、特にその圖柄を基礎としてその記號化が行はれる。知覺の成立に對して既に經驗の體制化が必要であることについては前にも述べたが、更らにそれが記號の體系中に攝取せられ、翻譯せられることによつて知覺體制が成立し、而してかゝる知覺體制の基礎の上に初めて高等なる思考活動が可能になるのである。従つて知覺體制の存在と云ふことが高次の思考活動に對する不可缺の條件であると云ふことができる。然るに思考活動に對する不可缺の條件はこれのみではな

い。先づそこには一つの課題状況が成立してゐなければならぬ。思考は精神活動の手段であり、而も直接的手段たる動作がその課題の緊張を解消せしめるに足りない場合に起るのである。かく直接的遂行活動が不毛であるときそこには最小作用の法則が働いて、先づ既得の知的操作に訴へられる。それは習慣的知的操作であり、未だ眞の思考活動と云ふに値しない。かゝる習慣的知覚操作が無効であるとき初めてそこに眞の意味に於ける思考活動が解放される。かゝる活動は必ずしも習慣的でない既得の知的操作の順次的適用であることもあり、或は一種の洞察によつてかゝる既得の知的操作から特定の操作が豫見せられ、選擇せられることによつて營まれる場合もある。前者は通例試行錯誤的思考と云はれ、後者は洞察的思考と呼ばれる。併し兩者の間に本質的な差異があるのではないやうに見える。既にピエル・ジャネによつても指摘されたやうに、全然盲目的な摸索なるものがあるか否かは別問題として、若しかゝるものがあるとすればこれは試行錯誤と云ふに値しない。試行錯誤と云ふのは失敗すれば別の手段を求めるもので、失敗しても無理にこれを押し通さうとする活動ではない。(この場合試行錯誤と云ふ語の語原は暫らく度外視することにしよう)。

従つてそれは結果による統制の法則に従ふものであり、その限りに於て合目的々活動であると云はなければならぬ。のみならずこの結果による統制の法則は實に思考活動の本質的原理であると云ふことができる。典型的な思考活動は或る課題状況に對して既得の手段が失敗するところに探索的活動として開始せられ、假説の設立を通じて、檢證の過程に終るものである。檢證が成功すれば素よりそこにその活動は終了するが、それが成功せぬ場合には再度新たなる探索的行動が開始せられる。これをジャネに従つて實驗的思考と名づけるならば、實驗的思考は全く試行錯誤的なものと云はなければならぬ。素より思考の高等なる段階に於ては、假説の設立も檢證の施行も共に意識的となり、又多くの假説を同時に設立するやうにもなるが、これは機能の複雑化を意味するに過ぎず、その本質的相異を示すものと云ふべきではなからう。

以上我々は思考作用が精神生活の手段的側面であることを述べ、それは課題状況を切り抜けるために知識體系の適用として營まれ、元來試行錯誤的なものであることを指摘した。従つてそれはやはり一種の手段的體制なる動作と極めて相似的な構造を有するものである。唯こゝ

では間接的な言語的知識體制が重要な役割を演ずると云ふ點で直接的な動作の體制とは異つた特徴を示すやうになつてゐる。この二つの體制が如何なる特異性を有するか、又兩者が如何なる關係にあるか、更らに知識體制それ自身の構造は如何なるものか、それが適用される場合に行はれる法則は何かと云ふやうな問題は心理學者に課される重要課題であるが、不幸にしてそれらに關して現代心理學が有する知見は詳らかでない。本稿の目的は主として思考作用の精神生活に於ける位置を明らかにしてかゝる問題に對處する我々の立場を用意せんとしたものであつて、問題それ自身の解明に立ち入ることはできなかった。従つてそれに關する考察は他日を期さなければならぬ。(昭和二十年十月、京都哲學會に於ける講演草稿)